

P2-199 子宮腺筋症に対する手術療法とその予後について

熊本大

本田智子, 内野貴久子, 宮原 陽, 本田律生, 岩政 仁, 片渕秀隆, 岡村 均

【目的】我々は子宮腺筋症の病巣を可及的に切除することにより、臨床症状の改善と妊孕性向上を期待できると考え、子宮腺筋症縮小術(debulking surgery, 本手術)を行ってきた。今回、本手術が妊孕性改善に及ぼす影響について後方視的検討を行った。【方法】1990年1月から2001年12月までに、当科において子宮腺筋症の診断で本手術を受けた患者41例について、年齢、経妊経産回数、不妊期間などの患者背景や術後の妊孕性について検討した。【成績】平均年齢は34.7歳(26~49歳)、平均経妊回数は1.18回(0~4回)、平均経産回数は0.24回(0~2回)であり、術前不妊期間は平均46.3カ月(4~144カ月)であった。妊孕性の予後を追跡し得た例での術後の妊娠率は57.9%であり、妊娠成立までの期間は16.6カ月(4~44カ月)であった。妊娠成立周期は13例が自然周期、2例がclomid周期、8例がIVF-ET周期であった。妊娠の転帰は流産28.6%、分娩71.4%で、35週で分娩に至った1例を除く20例は正期産であり、分娩は全例選択的帝王切開術を行った。妊娠成立の有無で比較すると、妊娠成立群で有意に術前の経妊回数が多かった。妊娠成立群のうち、分娩に至った群と流産に終わった群で同様に検討すると、流産例で有意に年齢が高かった。また、手術から妊娠成立までの期間に有意差は認められなかった。【結論】子宮腺筋症に対する妊孕性温存・改善を目的とした治療として、適応と要約に基づいた保存手術を選択することは有効な手段であることが示された。今後は本手術に組み合わせて、ARTを用いた治療を積極的に行うことで、さらなる生児獲得率の向上が期待できるものと考えられる。

P2-200 強度な月経困難症を呈する子宮腺筋症に対する病巣核出術の予後についての検討

弘前大

樋口 毅, 木村秀崇, 福井淳史, 坂本知巳, 横山良仁, 藤井俊策, 水沼英樹

【目的】子宮腺筋症に対する病巣核出術の有効性を検討すること。【方法】強度な月経困難症、過多月経を呈し、かつ子宮温存希望の子宮腺筋症例8例(29-42歳)にインフォームド Consentのもと、開腹術式にて子宮腺筋症病巣核出術を施行した。術後の子宮サイズ、CA125値、月経痛および過多月経の程度の推移を術前と比較検討した。子宮サイズは上下、左右、前後径(cm)をMRIまたは超音波画像より計測し、CA125値は月経時以外の測定値を比較した。なお、GnRHa療法中に手術を施行した症例についてはGnRHa療法前の子宮サイズ、CA125値と比較した。月経障害の程度は問診にて悪化、不変、少し改善、改善、著明改善の5段階で評価した。【成績】子宮サイズは術前後で平均がそれぞれ9.8×8.2×7.5, 7.7×5.3×5.0(cm³)、CA125値は同様にそれぞれ465.3IU/L, 48.2IU/Lに減少した。3例は2年以上の観察で子宮サイズ、CA125値の術前レベルへの復帰は認めていない。月経痛については術後初回の月経時2例で少し改善、6例で著明改善であったが、術後3カ月には全例著明改善となった。過多月経については初回月経時、8例全例で著明改善であった。術後の観察期間は3-27カ月(平均15.2カ月)であるが、月経障害について悪化、不変症例は認めていない。【結論】検討した8症例では術後の病変の増大、症状の悪化は認められていない。さらに長期的な観察が必要であるが、GnRHaがあまり有効でない、または副作用から使用しにくい症例では本術式も選択肢となりうることを示唆された。

P2-201 子宮腺筋症合併子宮体癌における検討近畿大¹, 近畿大奈良病院²小池英爾¹, 小畑孝一郎², 星合 昊¹

【目的】子宮腺筋症を合併した子宮体癌をまれに経験するが、その合併が、臨床上的どのように影響しているかは未だ明らかではない。そこで、今回、子宮腺筋症が子宮体癌に対しどのような影響を与えている可能性があるのかを臨床・病理学的に検討した。【方法】最近5年間に経験した子宮体癌における子宮腺筋症の合併の有無を確認し、その臨床背景、病理組織、予後などを比較検討した。【成績】子宮体癌における子宮腺筋症の合併は8症例に認められ、それらのStageは1b期:6例, 2a期:1例, 3c期:1例であった。3c期の症例は、筋層浸潤3mm/22mm, Parametrium(+), node(-)であった。また、8症例全て、再発等は認めず、予後良好であった。【結論】子宮腺筋症を合併した子宮体癌における、Stage, 病理結果、予後などに明らかな差異を認めなかった。